神話における太陽・月・星の関係

山田　仁史

キーワード　　神話、太陽、月、星、天体

はじめに

人類は神話の中で、太陽・月・星をどのように描いてきたであろうか。とりわけそれらの関係をどのようなものと見なしてきたのだろうか。

この問題については多くの先行研究がある。学史的に重要なのは、近代的民俗学の先駆となったヤーコプ・グリムの『ドイツ神話学』(Grimm 1875－78[4] Ⅱ：582－612)、人類学・民族学の古典であるエドウォード・タイラーの『未開文化』(Tylor 1871 Ⅰ：260－264, 296－325 抄訳 66－68, 79－85)、そして無文字民族の神話における太陽と月の関係を広く論じたオスカー・リューレ『未開神話における太陽と月』(Rühle 1925) であろう。

しかしそれ以外にも、非常に多くの蓄積がある (Schwartz 1864, Ehrenreich 1915, von Oefele et al. 1921, Frobenius 1923：50－63, 1929：247－268, 1938：113－118, Frazer 1926：441－667, Krappe 1938：81－158, Harva 1938：177－204 邦訳 163－188, 中島 1942：140－194, Stirling 1945, Rahmann 1955, Thompson 1955－58 Ⅰ：141－160, エリアーデ［1968］Ⅰ：203－248, 279－283, Ⅱ：7－57, 280－283, 大林［1975］, 1995, 1997, 1998：51－74, 日本民話の会外国民話研究会編訳 1997, 大林／吉田 1998：191－223, Berezkin 2007)。

私はこれらの先学、とりわけフロベニウスとベリョースキンの所論に学びつつ、限られた知識からではあるが、大まかな見通しを述べてみることにしたい。

1　モノとしての天体

まず、太陽や月を無生物として見、それとの関係で星にも言及するような神話がある。分布はきちんと確かめられていないが、各地から点々と報告されているようである。

たとえばアメリカ大陸では、円盤としての太陽（ヴァンクーヴァー島のヌートカ族、アステカ族その他のメキシコ諸族）、球としての太陽（カリフォルニアおよびパナマの諸民族）、さらには天蓋に開けられた円孔としての太陽観念も存在した（Stirling 1945：389）。

キリスト教圏にも、モノとしての天体という観念が見られることがある。ブルガリアの民間伝説では、イエス・キリストが幼いころ、世界はまだ完成していなかった。そしてキリストはいつも父である神の後ろをついて歩いていた。神はだんだん煩わしくなり、「我が子よ、もうついて来るのはたくさんだ。ちょっと座って、子供らしい遊びに興じなさい」と言った。するとキリストは大地の粘土をこねてたくさんの球を作り、それらを乾かした。1個を天に投げ上げると、父なる神はこれを祝福されて高く上げ、特定の場所に留まらせて太陽とされた。次にキリストはすべての粘土球を両手に持ち、上下左右に投げた。これらは天界に散らばってそれぞれの位置に留まり、1つは月に、その他は星々になった。しまいにキリストは、もう遊ぶ球が残っていないのを見て、星を落とそうと両手に土をつかんで投げつけた。ところが、神はこの土にも祝福を与えていたので、土はとても小さな星々になった。これが銀河である。このようにして天体ができたのだ。

これと似た話で、ルーマニアにも、太陽と月は幼子イエスが空に投げたりんごだという歌が知られている（Dähnhardt 1907－12Ⅱ：78－79，日本民話の会 1997：246－248－Schischmanoff および Gubernatis を引く）。

台湾のタイヤル族からは、太古の勇士が2個の太陽のうち1個を射たところ、これは出血して光熱を失って月となった、またその際に飛び散った血が星となったという伝承が伝わっている。

> 昔二箇の太陽あり。其一降れば他の一昇り、交々世界を照して昼夜の別を生ぜず。人々為に安息の時なく、加ふるに暑熱強く、草木は枯死し、畜類は困苦せり。此に於て衆議、太陽の一を殺して以て其惨禍を免れんことを欲し、遂に之を遠征するに決し、青年の男子五名を選て其任に当らしむ。五名の勇士は太陽に向て急ぎたりしに、道程頗る遠く、数十年を経たるも

前途尚遠し。而して同行者の一人は病死したり。此に於て二人は社に帰りて今日までの情況を報じ、他の二人は尚其行を継続することとせり。二名は社に著し、事の顚末を語り、社より更に応援隊を出すこととせり。数名の応援隊員は、各一人の幼児を背負ひ、又蜜柑及び粟等の種子を携帯し、往く往く道の傍に播種し、而して道を急げり。途中、先発隊の二名に追付きしが、此二名は既に白髪と為りて歩行自由ならず、頗る老衰の態なりしが、応援隊員に励まされ、前進を継続せり。途中に死亡者生じ、漸く目的地に達したる頃には、僅に三名を残すのみ。此三名は何れも出郷に当りて背負はれ来りし幼児の成長したる者なり。斯くて此三人は弓に矢を番へて太陽を射たりしが、標的違ひて何等の手応なく、西に入れり。続て東より他の太陽顕はれたれば、再之に向ひ第二の矢を放ちしに、的は違はず、其真中に射中し、忽然天より大なる血の塊落来り、其中の一人之が為に其頭を打砕かれて死したり。而して太陽は、瞬間にして其赫々たる光輝を失ひ、僅に蒼白の光を残すに至れり。現今月と称するは、即我等の祖先の為に射られたる此太陽にして、又星と称するは、此時太陽より迸散したる血液の片滴なり（小島ほか 1915－22Ⅰ：32－33）。

同様に、太陽を射た際に飛び散った血が星となったと伝える伝承は、タイヤル族に広く知られている。これはつまり、月や星を太陽からの派生物と見なす観念である（山田 2008：115－116）。

ある程度限られた分布を持つ形式も存在する。鏡として太陽や月が発生するというタイプは、満州からアルタイ山地にかけてのアルタイ語系諸民族に限定されているらしい。

満州族の例は、台湾タイヤル族と同様、射日神話の形をとる。黒竜江省孫呉県の老シャマンが語ったのは次のような話である。初めて天地が出現したとき、混沌暗黒の状態であった。至高の天神阿布卡恩都里を助けて、その２人の娘が３万３千３百３十３の小さな托里（満州語で銅鏡）を作って空中に放ると、満天の星となった。天神はさらに十個の火炎銅鏡を作り、これが十個の太陽になった。娘はこれらの鏡を手にもって天から地上を照らすと、一度に天に十個の太

陽が現れた。地上の草木は枯れ、大旱魃となった。最後に人間が、大きな木を切って弓を作り、椴樹（シナノキ）の樹皮と藤蔓を使って弦にして、天の太陽を射落とし、ただ銅鏡2個を残すだけになった。天神は娘2人に分担保管させた。これらが今の太陽と月である。月はまだ熱いので、娘は毎日手でこするうちに、黒あばたの点ができた。また手でこする時、全面が隠れてしまうこともあり、光が漏れ出て来ることもある。こうして月は満ち欠けするのである（谷編 1987上：5－8，大林 1997：305－306－『満族民間故事選』より）。

大林（1997：306－307）はこの他、モンゴル族とアルタイ・タタール族の例を挙げ、「鏡を媒介としての日月出現神話は、中国からの影響の問題は別として、少なくとも一部のアルタイ系諸民族のシャマニズムの要素になっていたように思われる」と述べた。これは、シベリアのシャマンの間に、太陽や月を表す金属板や鏡を、その装束に吊す習慣があったこととも関連づけられている（Harva 1938：180 邦訳 166）。

2　目としての日月・星辰

太陽や月が神ないし原古存在の目であるという表象は、広く知られている。有名なものとして、清の馬驌撰（ばしゅく）『繹史（えきし）』所収の『五運歴年紀』に引かれる、中国の盤古神話を取り上げよう。

> この世にはじめに盤古が生まれた。やがてそれが死ぬときにさまざまなものに変わった。吐く息は風や雲になり、声は雷鳴になり、左の眼が太陽、右の眼が月になった。胴体や手足は東西南北の四つの端〔四極〕と五岳（五嶽。五つの名山）になり、血液は河川に、筋脈は山や丘陵、池や沢など大地の起伏〔地里〕となり、肉は耕地に、髪の毛や髭はたくさんの星々に、皮膚の毛は草や木に、歯や骨は金属や岩石に、もっともすぐれた部分〔精髄〕は珠玉に、汗は雨に、そして体内のさまざまな虫は、吹く風に感化されて田野に住む民衆〔黎甿〕となった（伊藤 1996：29，徐編 2006：21）。

大林（[1975]：20）によれば、日月が目という観念は、旧大陸の高文化地帯とその影響下に集中し、とりわけ西の印欧語族と東のオーストロネシア語族

のところに色濃く分布している。そして「恐らく日本のイザナキ神話も、インドネシア、ミクロネシア、ポリネシアの神話と同様、盤古神話によって代表される華南の神話から分かれ出たものと見るのが、この分布像からみて一番適切であろう」という。

引用した盤古神話で面白いのは、日月が目から発生したのとともに、星辰が髪髭から発したという起源も語られていることである。同様に、世界巨人の身体各部から太陽・月だけでなく星も生まれたという神話は、点々と報告されている。

たとえばカルミュク族の説明によれば、世界はマンザシリ（＝マンジュシリ、仏教の菩薩）の身体各部からできていて、樹木はその血管より、火は内臓の温もりより、土は肉から、鉄はその骨より、水は血から、草は髪から、太陽と月はその両眼から、７つの惑星はその歯から、その他の星はその背骨からできたといったふうである（Harva 1938：110－111 邦訳 97－Žiteckij を引く）。

日月ばかりでなく、星も目と見なされる場合もある。アフリカでは、太陽が目という表象は東部に限られていたらしいが（大林［1975］：20）、マサイ族では太陽は天神ヌガイ Ngai の反射であるとも、またその目であるとも言われていた。この目で彼は昼間は見、星辰が彼の夜の目なのである（Schmidt 1964：236）。

台湾ヤミ（タオ）族の間では、星を「天の目」と称している。ド・ボークレール女史の調査記録から引いてみよう。

> 東南アジア諸民族とヤミ族は、かつて天地が互いに近接しており、天を押し上げた力強い男、巨人によって分離されねばならなかった、という信念を共有している。ヤミ族が言うには、大昔、天と地は黄金の梯子でつなげられていた。鹿野（1941）は、この金の梯子を伝って最初の人間が天から降りて来た、と聞かされたという。天地分離以前、海から飛び跳ねた魚が天に張り付き、そこに留まって銀河となった。星は mata-no-angit すなわち天の目と呼ばれ、多くの星座が知られ、名付けられている。月の面にヤミ族は、伸びる樅の木に載って天へ達した銀ヘルメットの影を見る（de

Beauclair［1957］：11－12)。

ここには、星を「天の日」とする観念のほか、天地近接・分離の伝承、そして銀河を魚ととらえる見方（cf. 大林 1999：71，105－106，614）のことも出ている。

3　太陽と月の性別

さてここから、人格化された天体の観念に移ろう。多くの民族において、ことに太陽と月は、昼と夜に現れる対照的な天体として人格化され、非常にしばしば何らかのペアとしてとらえられてきた。

このペアに、どんな性別が付与されているか、というのは興味深い問題である。身近な例を取ってみても、ドイツ語では太陽は女性名詞の die　Sonne，月は男性名詞の der Mond で、フランス語の le soleil（男性名詞)、la lune（女性名詞）とはちょうど反対になっている。世界的に見ると、こうした日月の性別はどのような分布を示すのだろうか。

この問題に大きな見通しを与えたのは、ドイツの民族学者レオ・フロベニウスの研究である。彼の描いた分布図は大ざっぱなもので、厳密なものではないし、そこに示された日月の分布については再検討の必要があるとも言われる。しかし、このように批判した大林も、その基本的な見方には賛成している（大林 1999：649－650)。よって、まずはフロベニウス説の大筋をおさらいした後で、その一部について近年出されている新たな学説を見てみることにしよう。

フロベニウスによれば、太陽と月の組合せ（コンステラツィオーン）には、次の4通りが存在する：

Ⅰ　双子コンステラツィオーン（化石文化）：太陽も月もともに男で、双子の兄弟。

Ⅱ　兄妹コンステラツィオーン（月文化）：太陽は女、月は男で、兄妹または姉弟。

Ⅲ　金星コンステラツィオーン（月文化の亜型）：月が男で、金星がその恋人。

Ⅳ　夫婦コンステラツィオーン（太陽文化）：太陽は男で、月がその情婦か妻。

（Frobenius 1938：115，1923：62－63）

(1)　双子兄弟としての太陽と月

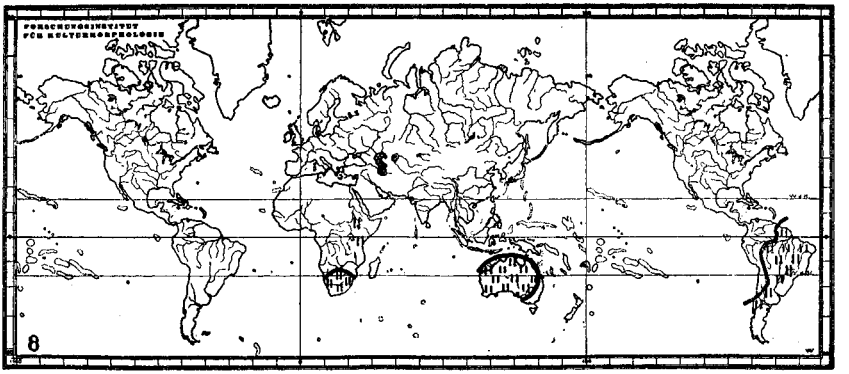

図1　Ⅰ双子コンステラツィオーン（化石文化）：月♂・太陽♂＝双子兄弟
（Frobenius 1923：59）

それぞれの分布を見てみよう。Ⅰの双子コンステラツィオーンは、諸大陸の南端、つまり南アフリカのブッシュマン、オーストラリア、そしてアンデス地域を除く南米に見られる。たとえばブラジルのグアラニ族からは、次の伝承が報告されている。夫に棄てられた妊娠中の女が、ジャガーの家までやって来た。ジャガーは女を食ってしまったが、お腹の中にいた双子はそのまま生まれた。兄のデレケイ Derekey は母の死因を知り、ジャガーの糞中から母の骨を探し出してそれを組み合わせた。ところが、もう少しで完成しようという時に、弟のデレヴイ Derevuy が乳を飲もうとして台無しにしてしまった。その後、2人は苦心の末、父親の住む所にたどり着き、高い木の上から「父よ！」と呼びかけると、「来なさい、私はここにいる」との返事が遠くから聞こえた。行ってみると、父は白い老人で、アララ鳥・オオハシ鳥の赤い羽の冠を身に着け、火のような目をしていた。父親は2人を家に連れて行き、どのように暮らしたいか尋ねた。兄は昼間を選び、弟は夜を選んだ。こうして2人はそれぞれ、太陽と

月とに変身した（Koch–Grünberg 1920：213－215－Telemaco Borba を引く）。

(2) 月は兄、太陽は妹

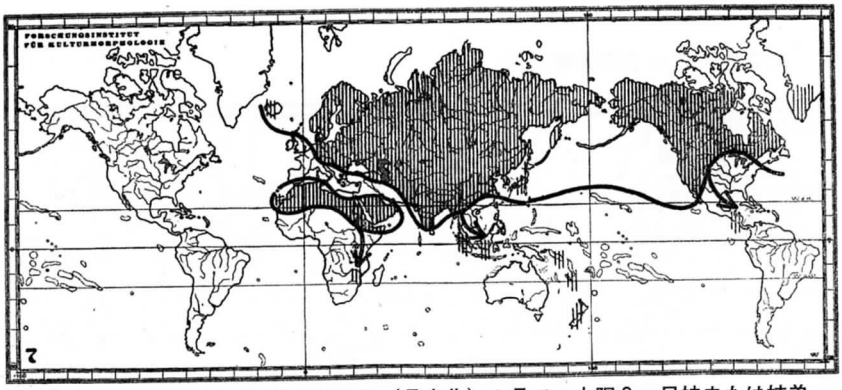

図２　Ⅱ兄妹コンステラツィオーン（月文化）：月♂・太陽♀＝兄妹または姉弟
（Frobenius 1923：55）

Ⅱの兄妹コンステラツィオーンは、これとは逆に、諸大陸の北方に分布している。『エッダ』では男性の月と女性の太陽は、ともに神話上のムンディルフェリ Mundilfòri の子供とされ、リトアニアやロシア、セルビア、ブルガリア、古フリュギア、ウンブリアを経て、地中海の反対側すなわちアフリカ大陸に渡ると、カビュールの民話では、太陽少女と月少年がキョウダイとされる。ほぼ全てのハム系諸族では月男・日女のペアが見られ、セム系では古ヘブライでは月が男、太陽が女だったのが、若い層で逆転された。シリアでは今でも月は男であり、南アラビアでも同様とされる。

内陸アジアに移ると、モンゴルからは古インドと同じ、男月・女日の物語が知られ、インドでは、月男性・日女性という観念の上に、日男性・月女性という見方が重層したのだろう。内陸アジア・北アジアでは、サモイェドやオスチャクで「月じいさん」と呼ぶように、月は男性とする考えの方が古い。日本では、アマテラスとツクヨミのキョウダイが知られる。

オセアニアでも、太陽が男性とする新しい層が現れる前の古層が断片的に見られ（ボルネオ、ニアス、ニューヘブリデス、フィジー）、オーストラリア南・

東南海岸部でも、太陽が月男の妻とされる。そしてベーリング海峡から東、すなわちアメリカ大陸でも、月男と日女がキョウダイという考え方は広く分布している（Frobenius 1923：54－58）。

このコンステラツィオーンには、興味深い伝承がしばしば随伴している。フロベニウスはそれを〈手の痕跡モチーフ（Handabdruckmotiv）〉と呼んだが、我々は三原幸久（2006）にならい、〈夜の訪問者〉モチーフと呼ぶことにしよう。

スティス・トンプソンの集成にも見られるように、このモチーフは北米から広く知られている（Thompson 1929：４－５，273－274）。エスキモーの伝承は、次のようなものだ。昔、兄と妹が大きな村に住んでいた。村には歌小屋 singing house があり、妹は毎晩、仲間たちとここで楽しんでいた。ある時、歌小屋のランプが全て消え、誰かが彼女の所へ来て強姦したが、誰なのか分からなかった。しかし、同じことがまた起きた時、彼女は手に煤を付け、男の背に塗りつけておいた。ランプがつくと、暴行者は兄だったのが分かった。彼女は大いに怒り、ナイフを研いで自分の両乳房を切り落とし、それを兄に与えて、「私を食べたいようだから、これでも食べて」と言った。兄はかっとなったが彼女は部屋を走って逃げた。彼女はランプを灯すための、明るく燃える松明をつかみ、小屋から飛び出した。兄も別の松明をつかんで追ったが、転んで火を消してしまい、ぼんやりとしか光らなくなってしまった。２人はだんだんと上昇し、途中で妹は太陽に、兄は月に変じた。新月が現れると、彼女は歌う、「兄が来た、兄が輝き出した、明るく。兄が来た、兄がやって来た」（Thompson 1929：４－５－Boas を引く）。

これと同様の、月によるインセストの物語はアメリカ大陸以外にも、韓国、インド、テュルク系諸族、サーミ、アイスランド、アフリカ（Baluga 族）から知られ（Frobenius 1929：259，Thompson 1955－58 I：146－147）、グリム童話の「千びき皮」（Allerleirauh：KHM 65）もこれと同類とされる。この話では、王妃を亡くした王が、亡妻によく似た我が娘たる王女と再婚しようと企てる。王女は思いとどまらせるため、太陽のような黄金の光を放つ衣装、月のような

銀の光を放つ衣装、星のように輝く衣装、そして千とおりの毛皮を集めた外套、という4つを求めたが、王はそれらを仕立てることに成功した。王女は顔と両手を煤で黒くして夜逃げし、やがて別の国の王と結婚して幸せに暮らした、と語られている（Grimm 1980 I：350－356 金田訳II：302－313）。この童話ではもはや太陽と月の姿は見えないが、父にインセストを迫られた娘が、煤を用いて顔と両手を黒くする点、そして太陽・月・星のような衣装が登場する点に、かつての星辰神話のおもかげが残されている。

これらの伝承で面白いのは、月の黒斑の由来とともに、太陽と月が共に出ない理由も説明されていることである。我が日本神話もまた、この兄妹コンステラツィオーン領域に属しているが、ここでも太陽と月の仲違いが語られている。『日本書紀』神代上・第五段の一書十一には、保食神が口から出したご馳走でもてなそうとしたところ、

> 月夜見尊、忿然り作色りして曰はく、「穢しきかも、鄙しきかも。寧にぞ口より吐れる物を以ちて、敢へて我に養ふべけむや」とのたまひ、廼ち剣を抜き撃ち殺したまふ。然して後に復命して具に其の事を言したまふ。時に天照大神、怒りますこと甚しくして曰はく、「汝は是悪神なり。相見えじ」とのたまひ、乃ち月夜見尊と、一日一夜、隔離りて住みたまふ（小島ほか校注・訳 1994－98 I：59－60）。

このように、ここでも月夜見尊の乱行が天照大神を怒らせ、結果として昼夜交替で空に現れるようになった、というのである。

(3) 月男と金星女、太陽男と月女

フロベニウスの挙げた第3の組合せ「金星コンステラツィオーン」は、かなり分布が限られている。すなわちそれは内陸アフリカであって、ここでは月が男性とされる点は先のIIに共通するが、その恋人は太陽ではなく金星とされている（Frobenius 1923：56）。なお、この組合せの分布はもっと広いらしいことが近年明らかにされている。そのことは後述しよう。

最後にIVの「夫婦コンステラツィオーン」（太陽男と月女が夫婦または情人）

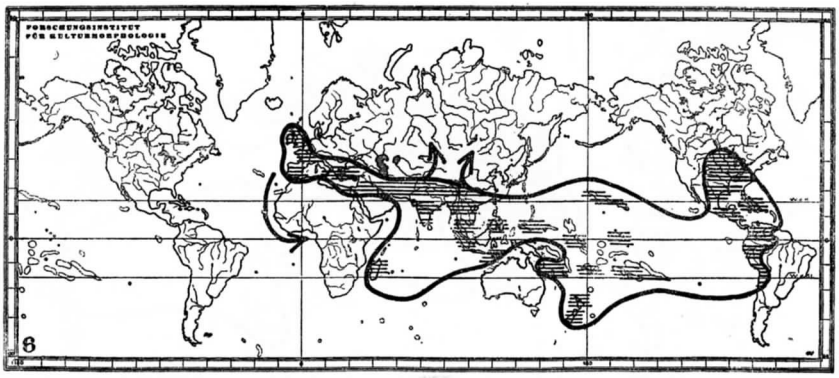

図3　Ⅳ夫婦コンステラツィオーン（太陽文化）：太陽♂・月♀＝夫婦
（Frobenius 1923：53）

であるが、これは南アジアから発して東は太平洋の島々を経て中米、さらにはその北東および南へ拡がり、西は地中海をめぐる地域へと分布が延びている。ただし、この分布域に含まれる神話の中には、太陽や月に関して異なる観念が複数並存しているものも少なくない。インドや中国、西アジアなどについて、フロベニウス自身そのことを認めながらもなお、この「太陽文化」に属すると見られる観念を抽出しているのである。例として挙げられているのはたとえば、男性原理としての太陽と女性原理としての月陰の対比（中国）、ポリネシアの太陽神マウイと妻のヒネ（またはヒナ、シナ、ティナなど）、太陽神としてのインカと、月女神としてのその妻、ギリシャのヘリオスとセレネ、ローマのソルとルナ、といったものである（Frobenius 1923：50－54）。

以上のように、太陽と月の性別およびその組合せを4分類した上で、フロベニウスはそれぞれの文化史的地位を、次のように論じた。これらのコンステラツィオーンは、まず2つのグループに分かれる。すなわちⅠとⅡ、ⅢとⅣがそれぞれ組になる。そして、Ⅰは人類居住領域（エクメーネ）の南端にしかないが、ここで貧弱化し、極限されているので〈化石文化〉の指標であり、これが最も古い観念である。Ⅱは北方大陸に根を下ろしている。そして両群ともに、偉大な歴史的・先史的事件の外部に横たわっている。

これに対して、ⅢとⅣのコンステラツィオーンは、過去数千年間に巨大な変

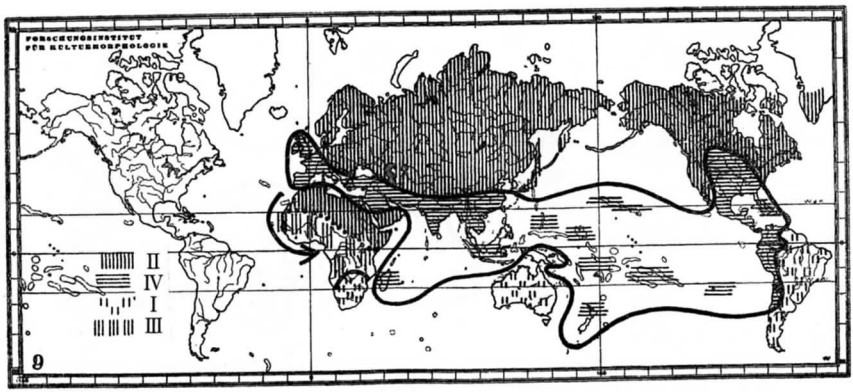

図4　天体観念各層の全体図：Ⅰ化石文化、Ⅱ月文化、Ⅲ月文化（亜型）、Ⅳ太陽文化（Frobenius 1923：63）。ここでは図1・2・3のローマ数字に合わせて、原図の番号を改変した。

動、つまり西アジアから地中海に沿っての高文化の伝播や、太平洋をめぐる文化交流のあった地域にある。「神話や世界観における偉大な変容は、太平洋・インド洋の縁辺においてのみ生じえたのである」。ただし、Ⅲ（金星）コンステラツィオーンは比較的新しい組合せである（Frobenius 1938：117, cf. 大林 1978：124－129）。

このフロベニウスの巨視的な展望は、これで完成品というわけではない。これから述べる金星コンステラツィオーンのように、すでに見直しが始まっている箇所も存在するのであって、今後各地域の専門家によって修正されてゆくべきものである。しかし、これに代わる全体像がいまだ示されていない以上、参照枠としての重要性は減じていない。

4　星と日月の関係

(1)　金星と月のペアをめぐって

さてここで、月と金星が夫婦である、という第Ⅲ群に立ち戻ろう。見てきた4群のうちで、これだけが星をペアの中に加えたコンステラツィオーンであった。実はこの組合せについては、近年ロシアの人類学者・考古学者のユーリ・ベリョースキンが、その分布はもっと広いことを明らかにしている。なおベ

図5　金星が月の妻というモチーフの分布（Berezkin 2007：13）

リョースキンは2009年3月の時点で、全世界からスラヴ系・ゲルマン系・ロマンス系・バルト＝フィン系の諸言語で記述された5000の刊行物から約1500のモチーフを抽出し、地域的分布のデータを公開している（Berezkin 2007：4）。

彼によれば、月が男性で、明けの明星と宵の明星の片方ないし両方がその妻である、という観念は、次のように分布している。サハラ以南のアフリカでは、月は女性とされることもあるが、多くの場合には男性であり、明けの明星か宵の明星はその妻と考えられている。このような考えは独立に起こりそうなものだが、非常に限られた地域的拡がりしか持たない。ヨーロッパに3箇所（ブルガリア、セルビア、リトアニア、バシキール[おそらくヴォルガ・タタール]）ある他は、ニューギニアとその周辺の島々か、それともアンデス以東の南米に集中しているのであり、これはアフリカの他の類話（死のモチーフ）も多数にのぼる地域なのである。「強調されるべきは、熱帯アフリカ同様、パプアの星神話も微弱にしか発達しておらず、〈金星に婚した月〉モチーフは、夜空の解

釈に関連した数少ないモチーフの1つなのである」(Berezkin 2007：12－13)。

このような分布状態から見て、〈金星に婚した月〉モチーフは、アフリカで発生し、5万年以上前に起こった現生人類の出アフリカ out-of-Africa に伴って運ばれた可能性が一応はある。しかし、それを実証するには、オーストラリアとパプアの夜空観念をもっと詳しく調べる必要がある、とベリョースキンは述べている（Berezkin 2007：17)。

(2) 〈騙されて子らを食う〉モチーフ

他方で、アフリカ起源がほぼ確実だとベリョースキンが考えるのは、〈騙されて子らを食う〉モチーフである。これは、太陽・月と星一般の関係を語る神話モチーフなので、やや詳しく見ていこう。

モチーフ構成は次のようなものだ。2人の人間が、それぞれ複数の子供（または、弟妹や母といった近親）を持っている。片方が、子らを殺して食おうと提案するが、自分自身の子供は相手から隠しておく。もう一方は実際に自分の子らを殺してしまう。一例を挙げよう。マレー半島の先住民で、ジャクン族に属するとされるマントラ族 Mantra（Mēntērā または Mintira とも）によれば、月の黒点は木で、その下に月男 Moyang Bertang が座っていると言う。太陽については、糸に結ばれた女性と見なされている。月はもう一人の女性で名を Kundui と言い、Moyang Bertang の妻である。星々は月の子供たちだが、太陽もかつては同数の子供を持っていた。しかし彼らは、人間たちがそれほどの光熱に耐えられないのではと恐れ、子供たちをむさぼり食うことに同意した。ところが月は星たちを食わず、太陽の見えない所に隠した。太陽はと言えば、月の子供たちはみな食われたものと信じて、自分自身の子供らを平らげたのである。これが済むやいなや、月は自分の家族を隠れ場所から連れ出してきた。太陽はそれを見て絶望と激怒のあまり、月を殺そうと追いかけた。以来この追撃は続いており、太陽は時々、月に近づいて噛みつくことに成功するが、これが月蝕である。月は今も、追跡者が近くにいる昼間は子供たちすべてを隠しておき、彼女が遠ざかる夜間のみ、彼らを連れ出すのである（Skeat & Blagden 1906

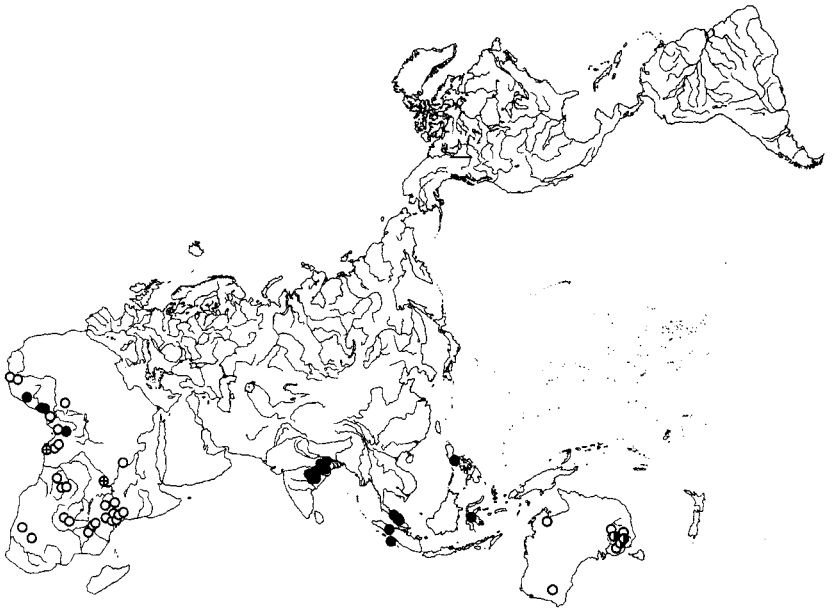

図6　〈騙されて子らを食う〉モチーフの分布

●：ある人がもう一人に、それぞれの子ら（母またはキョウダイ）を食おう（殺そう）と提案する；提案者は自分の身内を隠すが、他方は実際に殺す。一方の人および／または生き残った子供が太陽である。

○：ある動物が別の動物に、子供（母）を食おうと提案し、自分のを隠す。

⊕：太陽の仲間は星の仲間（星々）と同じくらい多かったが、月により死んだ（詳細不明）。

（Berezkin 2007：7）

Ⅱ：319－320）。

同様の伝承の記録があるのは、インド、マレーシア、西インドネシア、フィリピンにわたるドラヴィダ語族、ムンダ語族、オーストロネシア語族、モン＝クメール語族の諸民族で、ソラ、ビルホル、サンタル、ボンド、ブイア、バイガ、コンド、オラオン、ムリア、ビンジワル、バットラ、ジャハイ・セマン、キンタク・セマン、セノイ（サカイ）、マレー先住民（マントラ）、バタック、メンタウェイ、西・東トラジャ、タガルの各族。トリックの被害者は太陽で、トリックスターは月である。バイガ族では、太陽は自身の妹・弟たちを殺す。

天体の性別は一定しない。そしてベリョースキンが言う通り、ほとんどの事例はすでにラーマン（Rahmann 1955）が取り上げたものである（Berezkin 2007：6－7）。

しかし、以下のオーストラリアとアフリカは、ラーマンによってまだ気づかれていなかった地域である。以下、ベリョースキンの挙げた例を追ってみよう。まずオーストラリアには、月が太陽をだますモチーフはないが、ニューサウスウェールズ（すなわち、この大陸で東南アジアから最も遠い部分）の物語は、アジアとオーストラリアの諸事例が遠い関係を持つことを示している。つまりウォンギボン族 Wonghibon によれば、エミュー鳥は他の鳥に騙されて、自分の羽を切り、雛鳥たちを１羽だけ残して他は全て食ってしまった。喧嘩になり、エミューは自分の残った卵を相手に投げつけた。するとそれが空にくっつき、太陽になった。オーストラリア東南部には、これに多少とも似た話が存在する（Berezkin 2007：８－Dixon 1916：274－275, Waterman 1987：56を引用）。

月が太陽を騙す話は、西アフリカにもある。象牙海岸のバウレ族では、太陽は月に、それぞれの母親を殺そうと持ちかけた。月は提案を実行せず、仕事を助けてくれる母親を今も時々訪問するが、太陽はすべての家事を毎日一人でやらねばならない（Himmelheber から引く）。ベニンのフォン族では、月は太陽に、子供たち全員を殺そうと提案するが、太陽だけが子供らを溺死させ、子らは魚に変わった。月は、そうしなければ太陽の力が強すぎたのだと説明した（Olderogge による）。エウェ族（言語はフォン語に近縁）では、太陽は月に、子供らを食おうと言うが自分の子供たちは容器に隠しておく。子らはそこから星々となって現れる（Spieth より）。このエウェ族の話は、南アジア・東南アジアのものとほぼ同じである。似た話がガボンのピグミー族にも存在したらしい。日月のどちらが年長か議論中、月（女性）は自分は子供が大勢いると言い、太陽（女性）は答えて、月に殺されてしまわなければ自分にもたくさんいた、と言った（Trilles を引く）。

オーストラリア全土からは、２羽の鳥のうち１羽が他方を騙して子供を殺させる物語が広く知られている（Waterman 1987：55－60）。ただ、同大陸東南部

からの類話だけが、太陽の発祥と結びついている。2羽の鳥または2匹の動物の一方が他方を騙して近親を殺させる話は、サハラ以南のアフリカからも、広く知られる。ブッシュマンの諸集団から記録された話は、オーストラリアのものと同内容である（敵対者は2羽の鳥で、そのうち1羽が自分の子供らを殺す。Kotlyarを引く）。Kwiri族とIssansu族では、敵対者は2匹の動物であり（Abrahamsson 1951：10の他Kohl–LarsenとAllensbachを引く）、シルック族ではオオガラスとカラスが母たちを殺すことに同意し（Hofmayr）、その他全ての事例では、敵対者たちは動物で、子供ではなく母親を殺すことに同意するのである（典拠はBeidelman, Driberg, Frobenius, Holas, Holland, Mudge–Paris, Plancqueaert, Retel–Laurentin, Schwab, Tremearne, Walker, Werner, Woodward）。

以上のうち、アフリカ＝アジア型（太陽と月が子供たちを殺すのに同意）、コイサン＝オーストラリア型（2羽の鳥が子供らを殺すのに同意）、典型的アフリカ型（2匹の動物が母親を殺すのに同意）のいずれも、世界のその他の地域には類例を持たないのである（以上、Berezkin 2007：7－9）。

ここから導かれた結論は、以下のようなものである。アフリカにもアジア（オセアニアとオーストラリアを含む）にも、当該モチーフは広く知られる。それらの拡がりは、近い時代における言語領域とは相関せず、似た話は非常に異なる言語に属する人々の間から記録されている。このことは、それら物語の借用が比較的近時に、異なる言語的・文化的帰属の人々によって行われたか、あるいは言語・文化の状況が今日とは全く異なっていた、深い先史時代に拡散したことの結果であろう（Berezkin 2007：18）。

さらに、次の3点が特に考慮されねばならない。第1に、オーストロネシアとムンダ＝ドラヴィダの資料は、それらがアジアでは非常に古い話であるという見方に有利である。このモチーフが東南アジア島嶼部を越えて拡がったのは、オーストロネシア語族の移動によるものではなさそうだ。このモチーフはチモールには確実に存在しないし（Maaβ 1933：276）、マルク諸島および、ジャワ島からウェタル島に至る列島にも恐らくないが、フィリピンからは一例見つかっている。バタック、メンタウェイ、トラジャ、タガルの諸バージョンは、

恐らくオーストロネシア以前の層からの残存であろう。第2に、これらと最も近いアフリカの類例は、インド洋岸ではなく西アフリカに見られること。第3として、オーストラリアとアフリカのリンクは、海を越えての後世のコンタクトでは説明できない。よって、当該の物語は恐らく最初の出アフリカ移民たちに知られていたのだろう。コイサン族に知られる物語がオーストラリアのものと同一内容であること（1羽の鳥が他の鳥を騙して子供らを殺させる）は注目に値する。殺された母親（子供や妹弟でなく）の話はアフリカ特有のようであり、バンツー諸族に特に広まっている。子供らが殺されるモチーフとは違って、それは（なぜ特定の鳥は少ししか卵を産まないのかという）説明的な、ないしは（なぜ星々は月に同伴するが、太陽にはしないのかという）宇宙論的な含意を持たない。西アフリカでは、殺された子供と殺された母親の諸類話は、同じくらいの比率で現れる（Berezkin 2007：19－20）。したがって、ある人（鳥または月）が他の人を騙して子供たちを殺させた、という話がアフリカ起源であり、それに相当する年代（5万年前）を持つことは、かなりありそうなことである（Berezkin 2007：20）。

以上のベリョースキンによる想定が正しいとすれば、〈騙されて子らを食う〉モチーフは、人類における最古の神話に属するものということになる。その中には、太陽と月が一緒には現れず、しかも後者は多くの星を伴って出現することの理由が、きわめて素朴に語られていたのである。

むすび

太陽・月・星の関係は、神話においてさまざまに語られてきた。そこにはいくつかの特徴が見られる。まず、モノ（粘土球、血、鏡）や目と見なされる場合、太陽や月とともに星にも言及されることがしばしばあった。しかしこれらモチーフの分布はいまだ明らかにされていない。それらの中には、大林が論じた灰や燃えかすとしての銀河観念（1999：647－650）のように、人類文化史上きわめて古くまでさかのぼるような、素朴な考え方も含まれている可能性がある。

人格化された太陽と月については、双子の男性同士、月が兄で太陽が妹、月男と金星女が恋人同士、太陽男と月女は夫婦、という4つの組合せを、いちおう基本型と見なしてよいだろう。そしてここには、星の中でも明けの明星・宵の明星としてとりわけ目立つ金星だけが登場してもいた。また、今回は取り上げることができなかったが、太陽と月と金星をトリオとして捉える見方も（大林 1995)、さらなる研究を要している。

太陽と月と星の関係を語る、おそらく人類最古の神話と呼べるものは、月が太陽を騙して子供たちを食べさせ、自分の子供である星たちは隠しておいた、というものであろう。ここには、月と太陽が昼夜を隔てて現れることや、その際月にだけ星たちが随伴することの理由が、素朴な形で示されている。

さらにまた、引用してきた神話の中には、これらと並び、月の満ち欠けや斑点の由来、月より太陽の光熱の方が強い理由、日月蝕の説明、などが含まれている。太古から人々が天空を見上げて感じてきた疑問が、こうして解釈されているのである。

さて、太陽・月・星の関係を離れて、星の神話プロパーの比較研究ということになると、特有の困難が伴うことが予想される。別の所で論じたように（山田 2008：114－115)、星神話に関しては、利用できる資料の精粗に、地域や時代により、大きな差違が存在するからだ。それぞれの民族における星への関心の度合い、態度のあり方、調査者の興味や知識の程度といった諸要因により、記録の多寡・精粗が生ずるのである。

とはいえ、星や星座の神話には、人類がそれらをいかに観察してきたのかが、さまざまに語られている。狩猟や農具と結びついた星座名、特定の季節に出現して農耕サイクルを教えてくれる星の存在、航海において方角を知らせてくれる星などが主なものであり、北斗七星・オリオン座・すばるといった個性ある星たちが、とりわけそうした観察の対象となってきた(cf. Grimm 1875－78Ⅱ：604)。

いずれにしても、太陽・月・星の神話は魅力あふれる世界であり、いまだ研究すべき課題も数多く含まれている。ここで述べたいくつかのテーマが、今後

さらに解明されてゆくことを期待している。

付　記

本稿は、2009年7月4日から5日にかけて、南山大学名古屋キャンパスで開かれた「2009年世界天文年公認企画：モンゴロイドの宇宙シンポジウム」（環太平洋神話研究会・南山大学記念大会）において行なった口頭発表をもとにしている。発表の機会を与えてくださった先生方、シンポジウムにおいて有益なコメントを賜った諸氏に感謝申し上げる。

引用文献

Abrahamsson, Hans. 1951. *The Origin of Death : Studies in African Mythology.* (Studia Ethnographica Upsaliensia ; Ⅲ). Uppsala : Almqvist & Wiksells Boktryckeri.

de Beauclair, Inez.[1957] 1986. Field Notes on Lan Yü (Botel Tobago). *In : Ethnographic Studies : The Collected Papers of Inez de Beauclair* : 1 －16. Taipei : Southern Materials Center.

Berezkin, Yuri E. 2007. Out of Africa and Further Along the Coast : African–South Asian–Australian Mythological Parallels. *Cosmos : The Journal of the Traditional Cosmology Society*, 23 : 3 －28.

Dähnhardt, Oskar. 1907－12. *Natursagen. Eine Sammlung naturdeutender Sagen, Märchen, Fabeln und Legenden*, 4 Bde. Leipzig : B. G. Teubner.

Dixon, Roland Burrage. 1916. *Oceanic.* (The Mythology of All Races ; Vol. 9). Boston : Marshall Jones Company.

Ehrenreich, Paul. 1915. *Die Sonne im Mythos.* Aus den hinterlassenen Papieren herausgegeben, bevorwortet und mit Zusätzen versehen von Ernst Siecke. (Mythologische Bibliothek ; VIII. Bd., Heft 1). Leipzig : J. C. Hinrichs'sche Buchhandlung.

エリアーデ、ミルチャ［1968］1977－81『宗教学概論』全3巻（エリアーデ著

作集；1－3）久米博（訳）東京：せりか書房.

Frazer, James George. 1926. *The Worship of Nature*. London : Macmillan.

Frobenius, Leo. 1923. *Vom Kulturreich des Festlandes*. Berlin : Wegweiser-Verlag.

———. 1929. *Monumenta Terrarum. Der Geist über den Erdteilen*. (Erlebte Erdteile ; Bd. 7). Frankfurt a. M. : Societäts-Druckerei.

———. 1938. *Schicksalskunde*. Weimar : Verlag Hermann Böhlaus Nachf.

Grimm (Brüder). 1980. *Kinder- und Hausmärchen. Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm*, 3 Bde. Stuttgart : Philipp Reclam jun. 金田鬼一（訳）『完訳グリム童話集』全5冊（岩波文庫）東京：岩波書店、1979.

Grimm, Jacob. 1875－78. *Deutsche Mythologie*, 4. Aufl. 3 Bde. Besorgt von Elard Hugo Meyer. Berlin : F. Dummler.

Harva, Uno. 1938. *Die religiösen Vorstellungen der altaischen Völker*. (FF Communications ; Vol. 52＝№ 125). Helsinki : Academia Scientiarum Fennica. 邦訳は、ハルヴァ『シャマニズム：アルタイ系諸民族の世界像』田中克彦（訳）東京：三省堂、1971.

伊藤清司　1996『中国の神話・伝説』東京：東方書店.

徐志平（編）2006『中国古代神話選注』台北：里仁書局.

Koch-Grünberg, Theodor. 1920. *Indianermärchen aus Südamerika*. Jena : Eugen Diederichs.

谷徳明（編）1987『中国少数民族神話』上下、北京：中国民間文芸出版社.

小島憲之／直木孝次郎／西宮一民／蔵中進／毛利正守（校注・訳）1994－98『日本書紀』全3冊（新編日本古典文学全集；2－4）東京：小学館.

小島由道ほか 1915－22『番族慣習調査報告書』全8冊、台北：臨時台湾旧慣調査会／台湾総督府蕃族調査会.

Krappe, Alexandre H. 1938. *La genèse des mythes*. (Bibliothèque scientifique). Paris : Payot.

Maaβ, Alfred. 1933. Die Sterne im Glauben der Indonesier. *Zeitschrift für Ethnologie*,

65：264－303.

三原幸久 2006「顔の斑点で夜の訪問者を知る話：ラテンアメリカの先住民の説話にみられる兄妹インセストによる月の起源」『比較民俗学会報』27(2)：18－20.

中島悦次 1942『神話と神話学』東京：大東出版社.

日本民話の会外国民話研究会（編訳）1997『世界の太陽と月と星の民話』東京：三弥井書店.

大林太良［1975］1991「日から生まれた太陽」大林『神話の系譜：日本神話の源流をさぐる』（講談社学術文庫；957）：11－24. 東京：講談社.

———1978「フロベニウスの理論」蒲生正男（編）『現代文化人類学のエッセンス：文化人類学理論の歴史と展開』(ぺりかん・エッセンス・シリーズ；9）：119－137. 東京：ぺりかん社.

———1995「スサノヲは金星か」松原孝俊／松村一男（編）『比較神話学の展望』：47－52. 東京：青土社.

———1997「日月の誕生」『東方学会創立五十周年記念　東方学論集』：297－309. 東京：東方学会.

———1998『仮面と神話』東京：小学館.

———1999『銀河の道　虹の架け橋』東京：小学館.

大林太良／吉田敦彦 1998『徹底討論　世界の神話をどう読むか』東京：青土社.

von Oefele, Felix, et al. 1921. Sun, Moon, and Stars. *In*: Hastings, James (ed.), *Encyclopaedia of Religion and Ethics*, Vol. 12：48－103. Edinburgh: T. & T. Clark.

Rahmann, Rudolf. 1955. Quarrels and Enmity between the Sun and the Moon. A Contribution to the Mythologies of the Philippines, India, and the Malay Peninsula. *Folklore Studies*, 14：202－214.

Rühle, Oskar. 1925. *Sonne und Mond im primitiven Mythus*. (Philosophie und Geschichte. Eine Sammlung von Vorträgen und Schriften aus dem Gebiet der

Philosophie und Geschichte ; 8). Tübingen : Verlag von J. C. B. Mohr (Paul Siebeck).

Schmidt, Wilhelm. 1964. *Wege der Kulturen. Gesammelte Aufsätze*. (Studia Instituti Anthropos ; Vol. 20). St. Augustin bei Bonn : Verlag des Anthropos-Instituts.

Schwartz, F. L. W. 1864. *Sonne, Mond und Sterne. Ein Beitrag zur Mythologie und Culturgeschichte der Urzeit*. Berlin : Verlag von Wilhelm Hertz.

Skeat, Walter William & Charles Otto Blagden. 1906. *Pagan Races of the Malay Peninsula*, 2 Vols. London : Macmillan.

Stirling, M. W. 1945. Concepts of the Sun among American Indians. *Annual Report of the Board of Regents of the Smithsonian Institution*, 1945 : 387 – 400.

Thompson, Stith. 1929. *Tales of the North American Indians*. Bloomington : Indiana University Press.

———. 1955 – 58. *Motif-Index of Folk-Literature*, 6 Vols. Bloomington : Indiana University Press.

Tylor, Edward Burnett. 1871. *Primitive Culture*, 2 Vols. London : John Murray. 抄訳は、タイラー、E. B.『原始文化：神話・哲学・宗教・言語・芸能・風習に関する研究』比屋根安定（訳）東京：誠信書房、1962.

Waterman, Patricia Panyitiy. 1987. *A Tale-Type Index of Australian Aboriginal Oral Narratives*. (FF Communications ; No. 238 = Vol. 102, 2). Helsinki : Suomalainen Tiedeakatemia / Academia Scientiarum Fenniarum.

山田仁史 2008「台湾原住民における星の観念と神話」篠田知和基（編）『星空のロマンス：比較神話学シンポジウム』：114 – 123. 神戸：甲南大学.

Relationships between the Sun, the Moon and Stars in Myths

Hitoshi YAMADA

How have astral bodies been described and how have their mutual relationships been conceived by the mankind in various myths? Many scholars have addressed this problem, and the present author attempts at an overview, mainly on the basis of Frobenius' and Berezkin's theses.

In some myths, the sun and the moon are seen as inanimate objects, such as balls or mirrors ; in others they are regarded as eyes in the sky. Leo Frobenius classified general ideas concerning the relationships between the sun and the moon into four categories :

Ⅰ : twin constellation (fossil culture) : both the sun and the moon are male ; they are twins ;

Ⅱ : sibling constellation (lunar culture) : the sun is female, the moon male ; they are siblings ;

Ⅲ : venus constellation (a subtype of lunar culture) : the moon is male ; the venus is his lover ;

Ⅳ : couple constellation (solar culture) : the sun is male ; the moon his wife or lover.

Recently Yuri Berezkin has found that the distribution of Frobenius' venus constellation is wider, concluding that this motif emerged in Africa and was carried out of it to New Guinea and Australia among others. Berezkin's another finding is that the *Person tricked into killing his kin motif*, where very often the reason of the moon's appearance in the night sky together with stars is told, is distributed in Africa, Australia, parts of India and Insular Southeast Asia, thus suggesting its equally deep origin in Africa.